

『佐吉の遺言』

北区支部 池本 吉一

佐吉、その人は、言わずと知れた日本の大企業、トヨタ自動車の前身、豊田自動織機製作所の創業者、豊田佐吉のことである。彼の出生、人となりについて書かれている書物は数少なく、秘密のベールに隠されている。トヨタ自動車の社員の話では、当時の二宮尊徳のような人物と伝えられているようである。そこで、大胆な想像力をめぐらし、ここに佐吉物語を描いてみることにした。

江戸時代末期、それは、尊皇攘夷の嵐がふき荒れていた。しかし、京都より遠くはなれた濃美平野を流れる木曾川河口に位置していた尾張藩では、そんな喧騒をよそに、今まさに稲の収穫に忙しく農業を営んでいた。今の名古屋市の東北に位置した地域で農業を営んでいた豊田家も例外ではなかった。まさに、この時、豊田太郎、後の豊田佐吉は、この一家の長男としてこの世に生を受けた。当時、農家は子だくさんの所が多く、一家に10人以上子供がいるというのは当たり前であった。それは当時農業は、いや、今もそうであるが、家内工業で、一人でも多くの働き手を作る必要があった。母、キクは、「ほんとうに太郎は働き者にゃ。あ、そうそう、また、水車の調子が悪いにゃ。また、見ておくれにゃ。」「わかりました、母上。」そう言って太郎は、田んぼのあぜ道を通って水車小屋へ入ると、「ああ、またこの歯車だ。」とっては、まさに自動車の部品でもいじるかのごとく、器用に修理してみせたという。幼小時より太郎は、から繰り機械をいじるのが好きだったようだった。それは、父、五郎左衛門が、京都からのおみやげとっては、よく太郎にから繰り人形を与えていたのが影響していたようだった。「どうして、こんなに精巧に器用な動きをするのだろう。」太

郎少年の好気心は増すばかりであった。よく人形をいじくっては壊わし、部品の働きを深く理解し、納得していったようである。

やがて、時代は明治維新を迎え、天皇を中心とした町人の時代となっていった。明治政府の内部では、薩摩、長洲を中心に、政権争いが日々くり返えされていった。そして、ついには、薩摩藩内部で、征韓論をめぐり、同郷出身者どうしの西郷隆盛と大久保利通とが対立し、西南の役が起きるはめとなった。一方、廃藩置県が施行され、旧尾張藩は、愛知県となり、名古屋市を中心に発展していく時代となった。古来、美濃平野は、稲作中心の町で、木曾川に面して、多くの農家が点在し、稲作には、絶好の条件を備えていた。農業は、春に水田に種をまけば、自然の力で必らず秋には収穫をみ、決して人を裏切ることはない。強いて言えば、農業とは、神が人類へ与えた天職であり、物作りの原点なのである。このことを、すでに元服を向かえ、名を佐吉と改めていた豊田佐吉は、両親より、物作りの大切さを稲作を通じて、きびしく教えられていた。いつしか、佐吉は、子だくさんである豊田家の両親のもとを巣立ちする時期を迎えていた。その頃、明治政府は、富国強兵を旗頭に、欧米に習い、第一次産業は農業、そして第二次産業としての製鉄、建設、繊維を国をあげ、振興しようとしていた時であった。佐吉は思い起こしていた。母が夜なべをし、忙しい仕事のかたわら、子供たちのために、血豆いっぱいの手で、布切れで、服を作っていたのを思い出していた。当時はまだ江戸時代の名ごり色濃く、西洋の服を着ることなど夢のまた夢であった。各農家は、忙しい仕事のかたわら、蚕や、木綿より糸を作り、よっては機織りをして布を

作り、手縫いで衣服を作っているのが現状であった。「そうだ、これだ。」と佐吉はひらめいたのだった。世の農家の母親の苦労を軽くすべく、何んとか自動機織り器を大量生産できないものだろうか。しかし、いかんせん、自分には、元手となる資金がない。親の資産は農地で、しかも多くの家族がいる状況では不可能である。「何んとかならないものか。」銀行へ資金の話に行っても、「おまえのような、どこの馬の骨ともつかない者へ、金が貸せるか。」と言われるばかり。担保という大きな壁にぶつかることとなった。結局、昼夜を問わず働きづめに働き、やっと資金が貯まって事業を始めても、農業のことしか知らない佐吉は、失敗の連続だった。農業であれば額に汗して働けば、必ず秋には実のりを迎えるのに、自分の事業では、挫折感しか得られないのである。しかし、歳月がたち、農地も都市化の波に乗り、かつて、ただの水田だった土地にも高値がつくようになってきた。そうすると、今まで自分を乞食扱いかしてきた銀行が、手のひらを返すように資金を提供するようになってきた。日本の土地神話の始まりである。この時、佐吉は考えた。土地は、そこへ種を植えて、額に汗して作物を作ることにより、初めて価値が出るのである。水田でもなくなった更地に如何ほどの価値があるというのであろうか。馬鹿げている。不動産は、人の英知を注入してこそ価値があるというものだ。なぜ、私の先見性のある事業そのもの、私自身を担保としないのだろうか。そうか、銀行家は、先見性そのものを見破ぶることをおこたり、単純に不動産担保力さえあれば、資金供給することだけを考えているのか。これでは、いずれこのせまい日本列島に金を敷きつめ、うず高く積み上げていけば、いずれバランスを失ない崩壊するであろうことをすでにこの時、豊田佐吉は見抜いていた。はたして、佐吉の興こした豊田自動織機製作所は、時流の波に乗り、大きく発展し続けることとなった。佐吉は、持ち前の手の器用さ、つまり農業機具の修理にかけては、当時、村の間でも随一で、親も舌を巻いていた程だったという。その個性を如何なく発揮し、自動紡織機械

のからくり度は、時代を越えて天才的な仕上がりであったという。機械の歯車を蒸気の力によって早く効率良く稼働させる機織り技術は、全日本に破竹の勢いで広がり巨大な資本を手にするようになった。まさに、その後当社の物作りの精神は、主にその孫にあたる豊田章一郎氏によって受け継がれ、全国民が等しく手軽に買え、気楽に乗れる大衆車、カローラの開発へと連がり、今や、世界的な巨大企業へと発展することになるのであった。

さて、佐吉の今際の際に残した言葉は、いかなるものであったのであろうか。おそらく、今日の日本の金融界の将来を憂いていたのではないだろうか。不動産とは、人の英知が注がれてこそ生きるものであって、いやしくも製造業に生きる者たちは、その会社のコンセプトが、広く世界のマーケットに受け入れられなければ、その企業の生き残りは難しく必ずや破算への道へと至るのである。ただの更地では何も生まない。いわんや、土地にわざわざ価格をつけて売買するなど愚のこっしょうである。あまりにも単純すぎる話である。章一郎氏は、おそらく、佐吉翁の遺言をかたくなまでに守り、トヨタ自動車工業本体の銀行よりの借入金をゼロにしているのではないだろうか。(篠路整形外科)